

二 徹見徹底の勇者

江東に火ありと認むるとき、誰かその燃焼を疑はん。されどその胸にこたふることに、我家の火には比ぶべくもあらず。同じく夕景殷々たるの鐘聲、自覺者には何と響く。今日の日も暮れぬるとのみ告ぐる鐘、胸にこたへて涙こぼるゝ。皮相を去れ、中途半途を除け、常に徹底の境にあらしめよ。昔者、達磨西來して少林寺に壁觀九年を経て、漸く龍將慧可神光を得、次いで幾多の弟子を得。吾事終れりとして正に西歸せんとして、その四哲を判じて、予が皮を得たるもの、肉を得たるもの、骨を得たるものはあり、されど慧可獨り予が髓を得たりと。我等をして教の眞髓を得しめよ。人若し教の皮を得ば更に進んで肉を得よ。肉を得ば更に進んで骨を得よ。骨を得ば愈進んで髓を得よ。髓に達するものは、眞實の徹底者である。

佛教の眞髓に達せしもの、僅に五六輩に足らざりし、信・行兩座に見よ。眞實に君恩に徹せしもの、幾萬の軍士の中僅に四十七人なりし、赤穂の事跡に見よ。眞心徹到の容易ならざることを。而して亦、徹底せる人の牢固として抜くべからざる印象を。茲に暫く、赤垣源藏の一節を、浪花節ならで語るを許せ。

義士四十七人がいよく打入と云ふ、元祿十四年十二月十四日は、早天から降り出したる大雪。綿を千切つて投げる様な卍字巴と降りしきる中を、赤垣源藏、例の饅頭笠に赤合羽、貧乏徳利を腰に下げ、酔っぱらつて踰跟やつて参りましたのが、脇坂淡路守の家老、兄の鹽山伊左衛門の玄關口。勝手へ廻つて「頼むく」出て來たのが下女のお鍋。「源藏様、入らしやいまし」。「ア、お鍋か、大層美しうなつたのう」。「イヤですよ」。「時にお兄上は御在宿かな」。「旦那様は今日は御當番でございます」。「アア左様か、御當番とあ

ればお姉上は」。御持病の癩氣で休んでおいでございます」。御病氣とあれば是も致し方がない、實はな、某此度西國方のあるお大名の御抱と相成り、明日早朝出立致すにつき、お暇乞のため罷越したのだが、兄上は御當番姉上は御病氣、誠に残念千萬である、就いては何でも宜しいによつて、兄上の御紋の付いた衣類を一枚貸して呉れ。質にでも持つて行くのか知らぬとは思つたが、衣紋掛にかゝつた寢衣を、お鍋が持つて来て、「源藏様これで宜しうございますか」。ア、宜いく」と云ひながら、その寢衣を臺所の柱の釘に掛け、茶碗を借り受け、携へたる酒を滿々と注ぎ、兄上の御紋服の方へ向ひ、「偕お兄上、浪々中は厚きお情にあづかり、源藏身に取つて有難う存じます。就きましては此度漸く時節到来、或る西國大名の御召抱と相成り、明朝出發仕りまするに付、暇乞旁參上いたしたる處、御當番の由にて、誠に残念千萬に存じます、今日源藏持參いたしました此酒、何卒一献召上つて下さいまする様に」と、宛ら生ける人に物言ふ如くし、凝と紋服見つめたとき、胸にこたへたか涙をポロ／＼とツ。これが今生のお別れか。口には云はねど胸は張り裂く思ひ。何も知らぬ下女「アラ源藏様、泣いて居らつしやいまず、泣上戸ですな」。ア、寒いく、餘り寒さで眼から鼻水が飛出た」と冗談にまぎらして「兄上、お流を頂戴いたします」と供へた酒を飲干し、また注いで「兄上一献召されよ、お流は源藏が頂戴、兄上もう一献召されよ、お流は源藏が頂戴」。お鍋は頻にクス／＼笑つて居ます。「コリヤお鍋、兄上がお歸りになつたら、忘れぬやうに此の由を申上げてくれよ。此後いっお目にかゝられるやら分らぬによつて、お體を大切に遊ばします様。又お姉上様にも御病氣御大切に遊ばさるゝ様申上げてくれ」。「畏まりました、源藏様いっ頃又御出になります」。サー來年の七月には立派になつて參る、茄子の馬に乗

つて緒殻の杖をついて。「又アンナ御冗談を仰しやる」。「それになあ、此の徳利にはまだ酒がある、源藏態々持参した酒だによつて、何卒お兄上に召上つて下さる様申上げてくれ」。もうこれが此家の見納めか、これ今生の別れかと、思へば流石に心引かれて名残は惜しまるれど、かくてはあられじと、源藏は苦しい胸を謠にまぎらして立ち歸る。

入違ひに歸つて來たのが、兄の伊左衛門である。「お歸り遊ばせ、今日源藏様がお出でになりました」。「ア、左様か、何か用かな」。「折柄私は持病の癩で休んで居ましたゆゑ、御傳言はお鍋が伺つて居ります」。「お鍋、源藏は何か申し置いたか」。「源藏様は平常の通り酩酊つて入らツしやいまして、お兄上がお留守なら、御紋服を貸してくれと、それを柱の釘にかけて、お持ちになりましたお酒を茶碗について、そなへて何とか仰しやつて、泣いて入らツしやいました。そして残つたお酒を、失禮だが差上げてくれと」。「左様か」。「夫から源藏ヒヨロク中は一方ならざる御配慮にあづかり」。「まてく源藏浪々中であらう」。「アラ旦那様立聞をなさいましたね」。「馬鹿を申せ、それから」。「明朝早天、西國の大名のお召を……」。「ナニ西國の大名に召抱へられであらう。よし／＼分つた。もう休まう」と休まれたが、虫の知らせか何だか胸騒ぎがして仕方がない、兎角する中、夜が明けて直窓下が騒々しいので、「コレ／＼町人共何事だな」。「何事ツて、昨晚赤穂の家來が、本所松坂町の吉良家へ亂入して、首尾能く本懷を遂げ、今泉岳寺へ引上ぐる處で、何だそれを知らぬ寢惚坊が」と野次られても仕方がない。早速仲間の常平に様子伺はせると、一同は丁度仙台家の裏門の處を通る。源藏も果して一味に加はつて、平生の泥酔姿に引きかへ、凜々しく勇ましく天晴の義士姿。「常平、能く参つてくれた。是より泉岳寺へ参り、亡君の御墓前にて一同切腹の

かくご 覺悟なれば、最早お兄上にお目にかゝる譯に相ならぬ、昨日お暇に參つた砌
あにうへ 兄上にも姉上にもお目通いたさなかつたのが、呉々も残念であると申上げて
あにうへ 呉れ、これは兄上に遺物として」と、鎗についたる短冊を。これは癩の妙藥
と聞く、お姉上に。これは其許にと腰の印籠を渡し、源藏は雪を蹴立て、走
り行く。常平歸つて事の次第を申上げる。聞いて伊左衛門。「ア、源藏、たつ
ひとり 一人の弟、昨夜暇乞に來たものを、遇うてやればよかつた。奥やお前に
ぎり 義理ある弟、遇はずに返したのが、かへすくも残念」と熱き涙に咽ば
れた。

こ はなし 此の話の中で、源藏の心の中を知り徹す人や誰れ。下女のお鍋には固
わが はず より解らう筈もなく、嫂とても、根が他人だけに左程に感ずるでなく、ま
うる さいよひだけ た五月蠅泥酔がといふ有様。伊左衛門だけは流石に血が續いて居るだけに、
むね 胸にこたへて残念で、可愛想でたまらない。即ち下女は皮相の感じ、嫂は
みてついで 未徹底、伊左衛門だけが徹底して、源藏の意を酌んだと云へませう。

わたくしども 私共の周囲は誠に恩寵を以て包まれてある。君の御恩親の恩、この恩寵
うち の中にありながら、我は實に御恩を感ずること、果して伊左衛門の如く徹底
てき 的なるか。如來招喚の勅命は果して、腸を貫ぬき髓に徹する程なるか。

なにしじ 何事の在しますか
おは 知らねども、唯尊さに涙こぼるゝ
すべか 須らくこの心境に徹せねばなりません。